

明治憲法起草地探索

中 川 浩 一

筆者は平成九（一九九七）年三月に茨城大学を定年退官して、同四月に本学経済学部へ着任、教職課程を担当した時点から、「公民科教育法」の授業もする様になった。このことは筆者にとっては、教科教育法の授業を昭和三十七（一九六二）年度に担当して以来、全くの初体験であった。当時在籍した東京教育大学^{注1}では、四単位履修の「社会科教育法」は、前期が必修の概論であり、後期は選択の各論が「地理」「歴史」「公民」とあったのだが、「公民」は倫理学出身の梶哲夫先生が受け持たれていた。茨城大学教育学部に転出してからは、「社会科教育法」は、地理と歴史を中心に授業を構成していたのである。

学習指導要領と教育職員免許法の改訂によって「公民科教育法」を開講する必要がおこったときには、哲学専攻の教官にゆだねてきたのである。大学の授業を担当する様になってから実に三十五年後に初めて行う「公民科教育法」の授業をどう構成すべきか、流通経済大学への赴任が決まってから、いろいろ考えさせられた。

種々考えた結果、前半は「公民」の主要部分を構成する筈の日本憲法の成立を、前史を踏まえて考究する内容とした。そのことにかかわる教材研究のために踏査した実績が、本稿の要素である。なお、後半は「現代社会」の事例研究を主な内容としている。

明治憲法制定の経緯をたどる

衆議院・参議院の共同編集になる『目で見る議会政治百年史』（平成二

年）^{注2}によると、日本帝国が立憲政体を指向したのは、明治五年四月（一八七二年）、少議官宮嶋誠一郎が「立国憲議」を左院議長後藤象二郎へ提出した時点に始まると記されている。^{注3}

この建議は容れられて、五月、左院は「下議院ヲ設クルノ儀」を正院に提出の運びとなり、憲法制定への第一歩が踏みだされた。けれども、明治二十二年（一八八九）年二月十一日発布された「大日本帝国憲法」制定の原点となったのは、明治十四年十月十一日に御前会議で立憲政体に関する方針が決定され、翌日に明治二十三年を期して国会を開く旨の詔書が発せられた事実と把えるべきだろう。^{注4}

法規の起草及びその審査にあたりと定められた参事院の議長に就任した伊藤博文は、憲法調査のため、明治十五年三月三日に欧州出張の勅書を受けた。そうして三月十四日に東京を出発し、ベルリン、ウィーンに滞在して、グナイスト、スタイン、モッセの講義を受けている。^{注5}翌年八月三日に帰国した伊藤博文は、明治十九年秋ごろから、井上毅に首相秘書官の伊東巳代治・金子賢太郎を加えて、憲法草案の起草を始めたといわれている。^{注6}

このスタッフにより起草され、明治二十一年四月五日、内閣総理大臣伊藤博文から内大臣三條實美に脱稿報告^{注7}がなされた皇室典範・憲法案は、その骨子が当時は神奈川県三浦郡にあつて東京湾上の孤島であつた夏島の伊藤博文別荘で完成したため、『夏島草案』と呼ばれてきた。具体的な草案作成作業は『目で見る議会政治百年史』によれば、二十年六月には神奈川県金沢の夏島に移って起草に従事^{注8}と記載されるが、『近代

日本総合年表』では明治二十年六月一日の項目に「伊藤首相・伊東巳代治・金子賢太郎ら、相州金沢で憲法草案の討議開始（のち井上毅参加、夏島の伊藤別荘に移る）、八月、修正憲法草案を作成^{注8}」と記し、細部で表現を異にしている。^{注9}

二説がある草案起草地

『目で見る議会政治百年史』の「帝国憲法の発布」には、横須賀市夏島町に位置する「明治憲法記念碑」、「憲法夏島草案」の写真に加えて、「武州金沢の旅館東屋で、憲法起草作業を行う伊藤博文とそのブレイン（ジョラマ）」と「東屋跡に建つ憲法草創之碑」の写真が配されている。

ところで明治憲法成立史にかかわる詳しい知識を持ち合わせていなかった筆者は、「大日本帝国憲法」の草案は、現在は埋立によつて陸続きとなつた夏島の伊藤博文別荘で秘密裏に作られたとの俗説を鵜呑みにしてきたので、横浜市金沢区洲崎町に拠点となつた旅館があり、その跡地に「憲法草創之処」と記す記念碑があると記す『目で見る議会政治百年史』の記述は意外であつた。

平成九・十年度の「公民科教育法」では、大日本帝国憲法成立史に言及しなかつたため、『目で見る議会政治百年史』の該当ページを詳読せず、明治憲法の原典は、夏島で作られたと思ひこんでいたのである。

それゆえ、まず洲崎町にあるとされる「憲法草案草創之処」の碑を探し、由来を調べる作業を試みた。最初に手にした『横浜・川崎区分地図』の金沢区をチェックすると、京浜急行電鉄金沢八景駅の北東五百メートル前後に洲崎町域は位置している。さらに目をくぼると平潟湾の湾口に東半が野島公園で構成される〇・五平方キロほどの島があり、その一角が伊藤博文別荘跡と記されていた。

ところで、「明治憲法記念碑」は横須賀市夏島町にあると記されるのだから、横浜市金沢区野島公園にある伊藤博文別荘跡は、憲法草案起草地とは別の存在とすばやく気づくべきであつた。けれども別荘に籠つて起草との史実にのみ注意が向けられたために、野島公園内の跡地を憲法草

案ゆかりの場所と思ひこんでしまつたのである。

起草作業は旅館で始まる

京浜急行電鉄金沢八景駅プラットホームの名所案内標識には、「伊藤公別荘 約一・五軒 徒歩二十分」の表示がある。さらに駅前に設置の案内地図では、前記の区分地図が別荘跡と記した位置には、「伊藤博文記念館」と記されていた。またそこへの道は洲崎町の一部を通るから、途中で記念碑と行き会う可能性もあるかと考えてみた。

駅前を通る国道十六号線から右に折れ、平潟湾北岸沿いに二百メートル程で、東屋跡を表示する標識が眼にとまり、次の文章が金属板にエツチングされていた。

この地は、料亭東屋^{あづまや}の跡で、明治20年（1887）伊藤博文、伊東巳代治^{みよじ}、金子賢太郎^{かねこけんたろう}、井上毅^{いのうええいし}らが明治憲法制定のため草案を起草したところだ。

明治20年6月から、東屋に集まり草案の構想を練っていました。金子・伊東は東屋に泊まり、伊藤は夏島の別荘から、井上は野島の旅館から通いました。8月6日夜、東屋の伊東の室に盗賊が入り機密書類の入った行李^{こしり}が盗まれましたが、翌日書類は無事発見されました。その後、伊東・金子両名は夏島の伊藤の別荘に移り、草案が完成されましたが、東屋が起草の地であるとして、昭和10年（1935）「憲法草創之処」という記念碑が金子賢太郎書で東屋裏庭内に建てられました。が、東屋廃業後、現在ここより40m東に移され設置されています。

社団法人横浜国際観光協会
横浜市教育委員会文化財課

平成三年三月

そうして記念碑移設の位置には、主碑の右斜め前に、次の文を記す小型の副碑も建てられた。

明治憲法起草の碑

この碑は明治20年（1887）伊藤博文、伊東巳代治、金子賢太郎らが料亭東屋において明治憲法制定のため草案を起草したのを記念して昭和10年（1935）金子賢太郎書で建立されたものである。

料亭東屋跡は金沢八景駅寄約一〇〇米

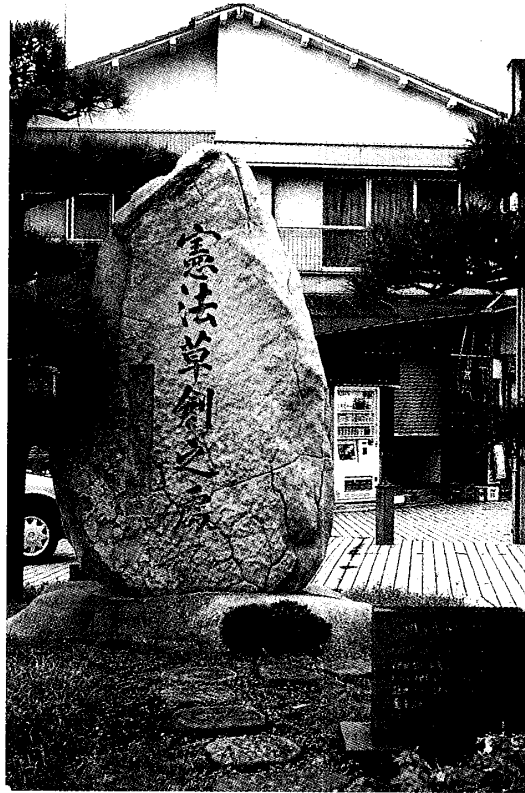


写真1 「憲法草創之处」記念碑
(1999年11月写)

一旦は野島公園に移設された記念碑

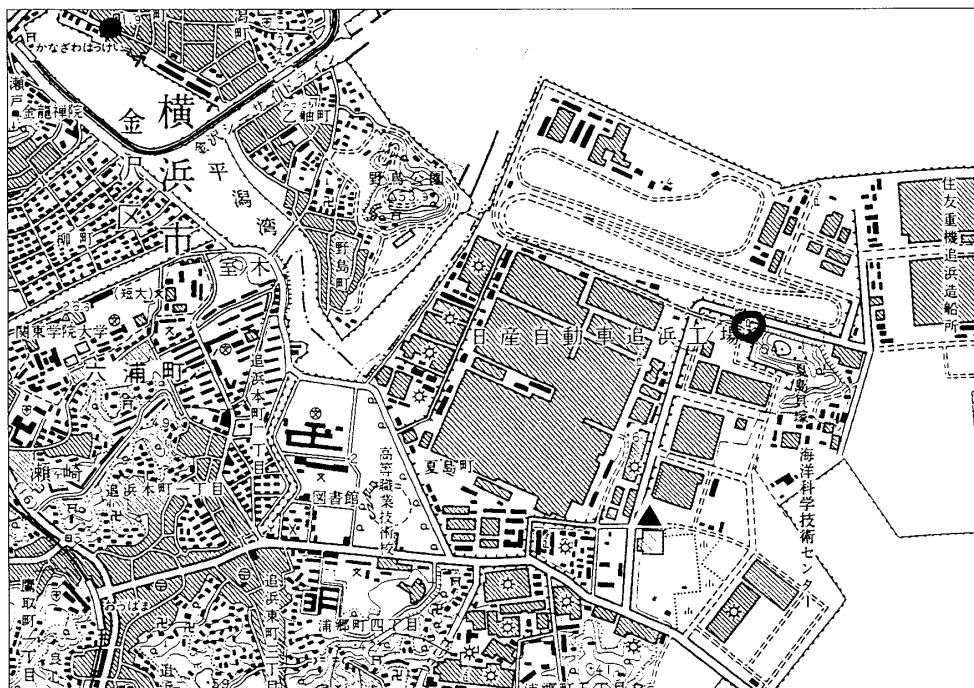
記念碑を後に小水道を渡り野島公園にたどりつくと、鉄条網に囲まれて茅ぶきの古風な家屋が建っている。表示はなにもないが、これ以外に「伊藤博文別荘」もしくは「伊藤博文記念館」に相当する建物は見当たらない。『目で見る議会政治百年史』の「明治憲法記念碑」が見当たらないのを不思議に思ったのだが、この地に建つ伊藤博文別荘は、夏島にあった別荘とは実は別物なのである。

右の事実を懇意にして頂いている横浜国立大学名誉教授伊倉退蔵先生（地理学）にお伝えしたら、世上に伝わる誤解に君もはまりこんでいるとして、次の便りを頂いた。

1：20,000 迅速図「洲崎村」（明治15年測量）を1：25,000に縮小



地図① 草案起草当時の夏島とその周辺



地図② 1:25,000「横須賀」平成10年修正測量

●(北西隅)は「憲法草案草創之処」、▲(南東部)は「烏帽子巖之跡碑」

○は「明治憲法草案起草の跡」碑の位置

学兄が訪ねられた伊藤博文記念館は旧別荘ではありません。夏島にあった旧邸は、小田原に移され、そこで一九二三年倒壊消滅したのです。憲法草創の地は大きくみて誤ではないでしょうが旧邸はありません。

ことの意外に詳細を調べる必要を感じて読み比べた蔵書から、次の五冊が憲法制定史跡に言及する事実を「発見」した。

* 神奈川県商工部観光課『観光かながわ』(2)横浜・川崎(昭和四十四年)

* 森篤男『ヨコハマ散歩』(昭和四十四年) 横浜市観光協会

* 神奈川県高等学校教科研究会社会科歴史部会『神奈川の歴史散歩』(昭和四十五年) 山川出版社

* 瓜生卓造『横浜物語』(昭和五十四年) 東京書籍

* 神奈川県高校地理部会編『現代の神奈川―地域をみる眼』(昭和五十六年)

最も詳しく、参考になる点が最も多かったのは『ヨコハマ散歩』であった。意外であったのは、毎日新聞地方版の連載記事を集録のうえ明治百年を記念した『神奈川の百年』上・下(昭和四十三年)有隣堂、小田貞夫『横浜史を歩く』(昭和五十二年)日本放送出版協会が、明治憲法草創に全く言及しなかったことである。

これらの文献によると、東屋裏庭に設置された記念碑は、直ちに現在地に再建されたのではなく、最初は野島公園内の伊藤博文記念館脇に移された事実が明らかになる。またそのゆえに、附近の人も、公園に働く人も、観光バスのガイドも、この茅葺きの家屋の一棟が伊藤博文が明治憲法を制定するため、憲法条文を審議した別荘であると説明している^{注10}のであるという。

夏島の状況を詳説した文献

東屋での草案審議については、東屋女将の談話が「一之瀬愛子さんは

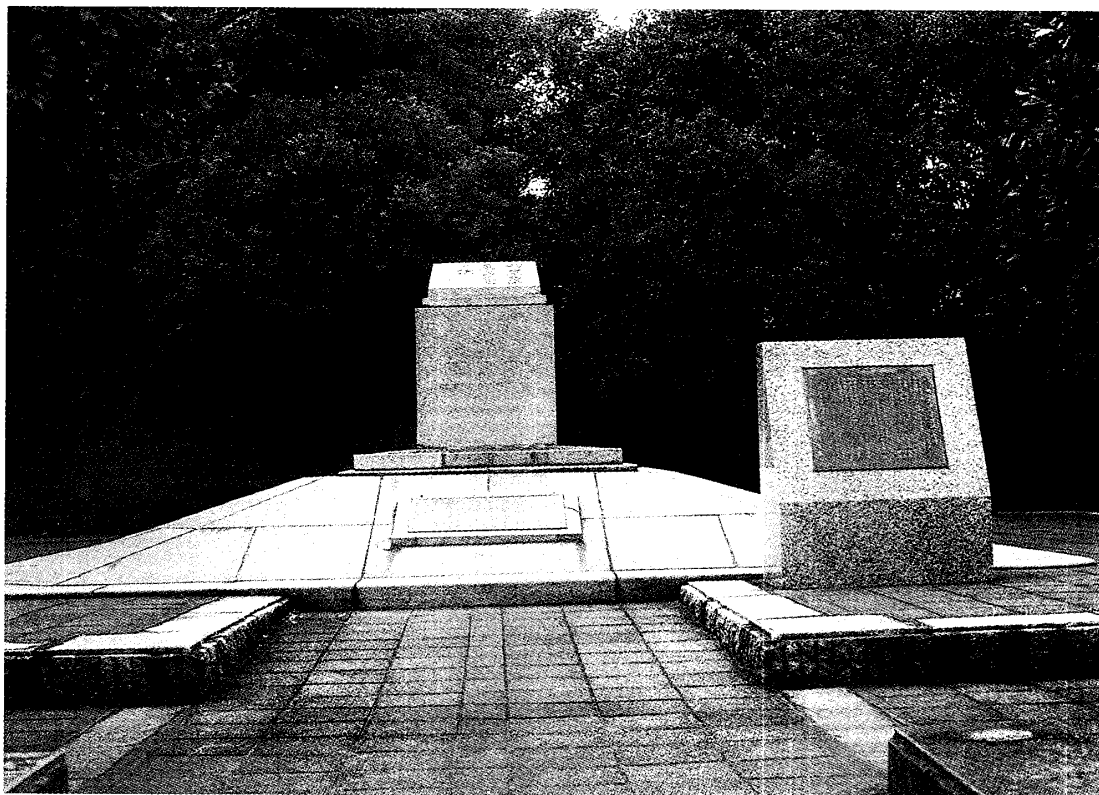


写真2 正面からみた明治憲法草案起草記念碑と副碑（2000年1月写）

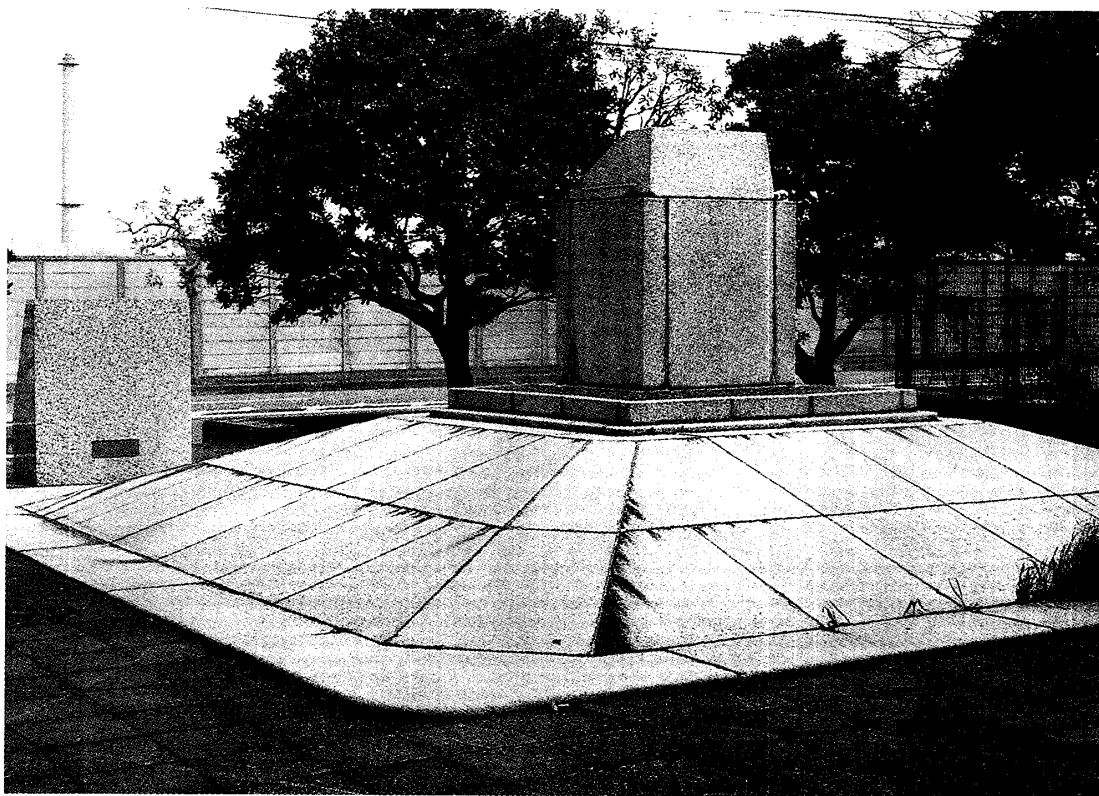


写真3 裏面からみた明治憲法草案起草記念碑と副碑（2000年1月写）

生前、当時の思い出を「伊藤氏が憲法を起草しているのは朝の二時間だけ、あとはもっぱら酒を飲んでいた。しかし雑談中でも憲法の話がでるととたんに引きしまった」ともらした^{注11}と紹介されている。平潟湾岸の東屋での起草について、『横浜物語』は『金沢歴史年表』からの引用としたうえで、「明治二十年六月、伊藤博文が金沢に来て夏島に別荘をつくった。同二十一年六月六日、憲法制定のための会談が東屋旅館で行われ、七月三十一日におわった。この会談はのちに夏島の伊藤博文別荘に移された」と記し、『近代日本総合年表』や前記の標識とは日付を異にしている。

夏島に起草の地を移転してからの状況も、『ヨコハマ散歩』が詳しい。そこで明治二〇年三月起工して六月に落成していた伊藤博文の夏島の別荘に、伊東巳代治、金子賢太郎の二人は泊まり込み、伊藤、井上の二人は東屋から船で夏島にかよったり、泊まり込んだりして憲法の審議をした。

夏島から数百歩離れた処に、烏帽子岩という巖があった。憲法審議につかされると、この烏帽子岩まで遊泳したという。忍び寄る者もないこの夏島の別荘は一戸建てで六室あった。……間取りは、玄關脇の三畳に金子、廊下をへだてて伊藤博文の室（この室で憲法を起草審議した）次が襖の仕切りがあつて伊藤の休息室、廊下をへだてて裏側に伊東巳代治の四畳半、その隣は控室、次は配膳所、配膳所の斜め奥に廊下をへだてて女中部屋、この女中部屋も襖で仕切ることが出来る様になっていた。

……夏島の別荘は、その後、陸軍の砲台建築予定地になったので、伊藤公はこの別荘を明治二年二月二十八日に小田原三の丸の幸田口に移建し、のち、小田原の田辺輝実に譲渡してしまったが、関東の大震災で、この由緒ある建物は倒壊してしまったという^{注12}と記されている。

野島の別荘は移建か新築か不明だが、土地台帳への記載は大正九年四月で、養子の伊藤文吉が行っている。所有は二転三転し、昭和三十四年に横浜市の手へ帰した由である。^{注12}

夏島の記念碑を訪ねる

明治憲法草案起草にかかわるもうひとつの記念碑が位置する個処は、二万五千分の一地形図「横須賀」図幅によって容易に推定できる。日産自動車追浜工場の北東隅に史跡としての夏島貝塚の注記があり、かたわらに記念碑の記号も見いだせるからである。

京浜急行電鉄追浜駅前から東進し、夏島貝塚通りと記される街路に並ぶバス停留所の標識には、デイトムの日産自動車工場への交通は、住友重機追浜造船所ゆきを利用する様にとの指示がなされている。

探訪目的の記念碑は、地形図で推定した位置に設置されていた。花崗岩で作られた屋根状の基盤の中央に台石がおかれ、頂部に「明治憲法草案起草の跡 金森徳治郎書」と刻んだ碑石が取り付けられている。金森は、幣原喜重郎内閣の日本国憲法制定担当大臣だった人である。右斜め前には副碑があり、次の文が記されている。

明治憲法起草遺跡記念碑

この記念碑は、現在地から南方二百メートルの場所に、大正十五年十一月に建立されたものである。

当時、明治憲法草案起草の関係者であり記念碑の建立発起人の一人であった金子賢太郎の言によれば、その場所は、伊藤博文の別荘の草案起草の室にあてられた十二畳半の部屋であったという。

記念碑は、太平洋戦争後荒廃していたが、当時この地で操業していた富士自動車株式会社の手によって、一部原形を変えて改修され昭和二十六年二月再度除幕された。

このたび元の位置を含む一帯が、日産自動車株式会社に帰属することとなったので、同社と協議のうえ、現在地に移設させ、明治憲法草案起草の遺跡を示す唯一の記念碑として永く後世に伝えようとするものである。

ちなみにこの碑の外周は、七十六個の石からなるが、これは明治憲法の七十六箇条を意味し、礎石の縦横各二十二尺二寸一分一厘は憲法発布

の明治二十二年二月十一日を示したものである。

昭和五十年四月二十六日

横須賀市

これとは別に「横須賀市指定市民文化資産 横須賀風物百選 明治憲法起草地記念碑」と題する標柱が建ち、次の文が記されている。

伊藤博文らが明治憲法を起草した夏島の別荘跡地に、草案に加わった伊東巳代治、金子賢太郎らが発起人となり、大正一五年に建立された。昭和五〇年に現在地に移転された。

再建された記念碑を調べる

主碑の台石正面には、SITE/OF/DRAFTING/THE MEIJI CONSTITUTION/IN THE YEAR/MEIJI 20—A.D. 1887とわかち書きで表記されていた。右側面には協賛 神奈川県 横浜市 横浜商工会議所 横須賀市 横須賀商工会議所 富士自動車株式会社と縦書に記されている。裏面には PROMOTERS/IWATARO UCHIYAMA/SOJI YAMAMOTO/MAYO S.SILVEY/JAMES H.DRAUCHON/REBUILT ON/11TH FEBRUARY 1951とつづる英文表記に加えて、発起人 内山岩太郎 山本惣治 メーヨー・エス・シルビー ジェームズ・エイチ・ドローン 昭和二十六年二月十一日再建の和文表記がなされていた。

和文表記による碑石が台石上に取り付けられているとはいえ、台石の表記が英文主体であるのは、再建当時この地がアメリカ軍基地内であったこととのかかわりと思われる。富士自動車は、基地内でアメリカ軍関係の事業を営んでいたのだろう。発起人に名を連ねる二人の外国人は、富士自動車の関係者であるのだろうか。

この地が長くアメリカ軍によって占有されていた事実は、『神奈川の歴史散歩』（一九七一年三版）に「現在は米軍の施設内になっている」の記事から読みとれる。^{注13}

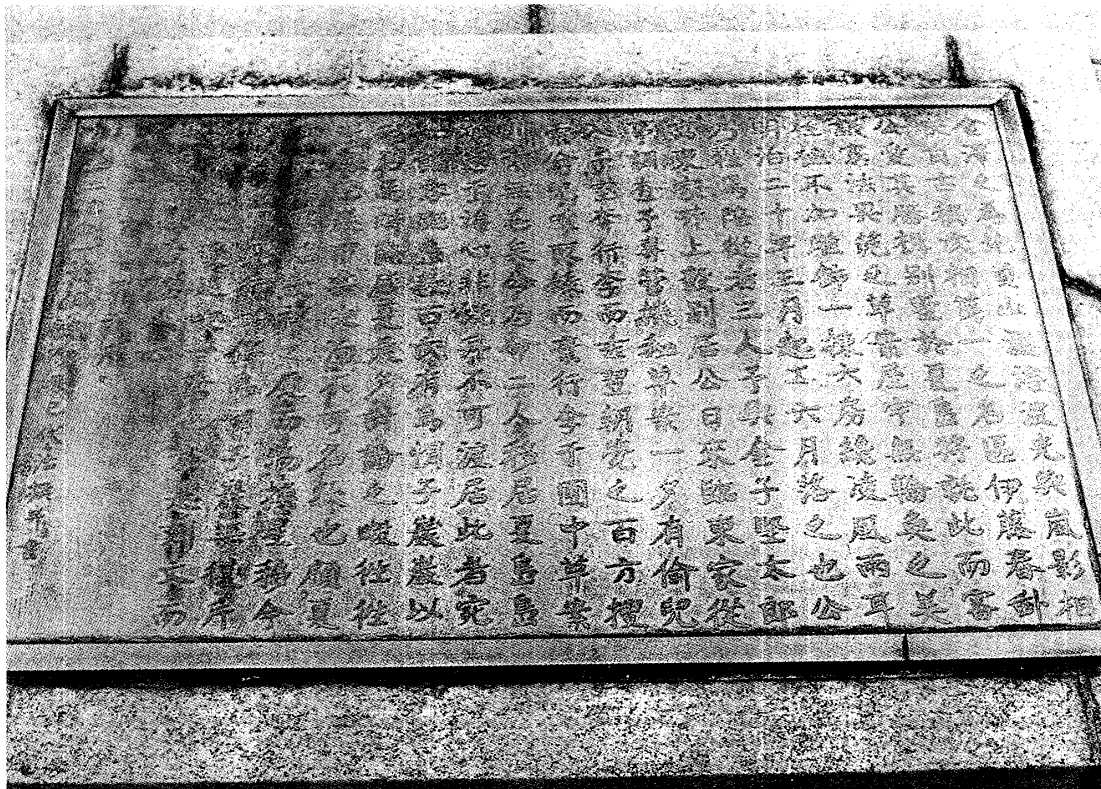


写真4 基盤正面に設置される建碑当初からと思われる銘板（2000年1月写）

基盤正面には大正十五年（一九二六）年に記念碑が建立された当時の設置と思われる伊東巳代治撰文並びに書と末尾に記す青銅の銘板が取り付けられている。風化が進んで判読困難の部分がある銘板の文章から、これが前述した『ヨコハマ散歩』に掲載の解説の原典と判定した。

昭和五（一九三〇）年刊行の『日本地理風俗大系』Ⅲ 関東篇には、「憲法記念碑」の写真が収められているが、当時は現在の台石はなく、その位置に別荘の間取りを示す平面図がこれも青銅の銘板としてあった由である。

基盤には、次の文が刻字され、読み進むと副碑の文の原典が判明する。

建碑要旨

- 一、碑之位置據残存之古井及古来検定別荘跡而建之
- 一、碑之一辺二十二尺二寸一分一厘乃表憲法発布之年月日
- 一、碑之石数七十六個乃表憲法之条数
- 一、中央之青銅盤表憲法審議室之位置

発起人

伊東巳代治 金子賢太郎 財部彪 加藤寛治

建設委員

刑部斎 乾慶蔵 青島健 浅井将之

工事担当者

大庭常雄 増田秀雄

発起人に建碑当時の横須賀鎮守府司令長官が名を連ねるから、原碑建設には海軍もかかわったかと思われる。

烏帽子岩の記念碑も建立

見学を終わって最寄りのバス停留所にもどる途中、工場の通用門脇に「烏帽子岩之跡碑」と記す石柱が建ち、かたわらに次の文章を記す標識がおかれていた。

烏帽子岩は烏帽子島ともいわれ、追浜の砂浜が東につきる突端に存在していた。大正七年に海軍航空隊の建設に伴う飛行場造成のため切崩され、消滅した。本碑はこれを記念して昭和二年に建立されたものである。

当時の形状は名の如く烏帽子の形をしたもので、標高約十五メートル、周囲約二百メートルで、海を隔てて夏島と対していた。江戸時代には旅人や近傍の人たちは、この岩と夏島の間を、海路往来していたもので、その風光明媚な自然景観は、一幅の絵を見るようであったという。

このたび、旧飛行場地先を、さらに日産自動車株式会社により埋立てられたため、記念碑を本位置に移設して、その保存を図ったものである。

なお、烏帽子岩が存在していた位置は、本碑より北北東百五十メートルの処である。

昭和五十七年六月

横 須 賀 市

日産自動車株式会社

明治十五年測量二万分の一迅速図「洲崎村」図幅によると、平潟湾は野島浦と表記され、夏島はその湾口部に位置して烏帽子島と対峙する形になっている。

往路に立ち寄った追浜郵便局で風景日付印の有無をたずねたら、素材となる史跡や名所が見当たらないので持ち合わせないと局長が答えられたが、明治憲法記念碑は充分その任に耐える存在ではないかと思われる。夏島と烏帽子岩の往時も再現したい題材である。

憲法草案審議につかれたメンバーが、骨休めの遊泳先を烏帽子岩に求めた事実も、前記の青銅製銘板に記されている。

注

（１） 在籍した十六年間は附属中学校が本務であり、当初から附属高等学校、

五年目から教育学部が併任となった。

(2) 内容構成は、政府与党サイドで、昭和期の章には「安保騒動の夏」(傍点筆者)の節がある。

(3) 衆議院・参議院『目で見る議会政治百年史』(平成二年)大蔵省印刷局、一〇ページ。

(4) 『近代日本総年表』(一九六八年)岩波書店、八八ページ(出典は「伊藤博文伝」)

(5) (4)の九〇ページ(出典同前)

(6) (3)の十二ページ。

(7) (4)の一四ページ(出典同前)

(8) (4)の一〇ページ(出典は稲田正次『明治憲法成立史』)

(9) 井上毅の地位は、法制局長官であった。

(10) 森篤男『ヨコハマ散歩』(昭和四十四年)横浜市観光協会、一七五・六ページ。

(11) 神奈川県商工部観光課『観光かながわ』(1) 横浜・川崎(昭和四十四年)六六ページ。

(12) 注10に同じ。

(13) 神奈川県高等学校教科研究会社会科歴史部会編『神奈川の歴史散歩』(一九七一年三版)一〇〇ページ。